

## 『韻鏡』 「開合」 臆解

太田 斎

### 0. 開合

本稿では平山久雄 1967 の推定音価に基づき議論を進める。そこに挙がる推定音価には具体的音声を重視した推定音価と音韻対立をコンパクトに纏めた推定音価の二種がある。本稿では主として前者を用いるが、必要に応じ、便宜的に後者を / / で括って表わすことにする。前者にしても精密な音声表記を意味するものでないことは言を俟たない。以下、特に必要が無ければ舒声韻の表記のみ挙げ、入声韻の表記は省略する。韻目を挙げる場合は、慣例に倣い四声相配する韻は平声の韻目を以て代表させ、去声のみの韻はその韻目を挙げることにする。

周知の通り、介音 *-u-* の有無により、有るものを合口、無いものを開口、そして両者を併せて開合と称する。中古拗介音の *-y-*、*-y-* もそれぞれ *i+u*、*i+u* と解釈できるから、合口介音に含まれる。中古音の場合、開口、合口は単に開、合とのみ称することも少なくない。円唇母音を主母音とする韻、そして唇を用いて調音する(=円唇的調音の)韻尾の *-u* や *-m/-p* を持つ韻に於いては開合の対立が無い。

いわゆる円唇化喉音韻尾については *-ŋ<sup>w</sup>/-k<sup>w</sup>* とし、*-uŋ/-uk* という表記は用いない。この円唇化喉音韻尾を認める立場に立つと、これらを持つ韻もまた開合の対立が無いとすることができる。円唇化喉音韻尾を持つとされるのは通撰の東一 *ōŋ<sup>w</sup>/aŋ<sup>w</sup>/*、東三 *iōŋ<sup>w</sup>/iŋ<sup>w</sup>/*、そして江撰の江韻 *aŋ<sup>w</sup>/aŋ<sup>w</sup>/* である。通撰の冬 *oŋ/aŋ<sup>w</sup>/*、鍾韻 *ioŋ/iŋ<sup>w</sup>/* は具体的音声を重視する推定音価では円唇化喉音韻尾となっていないが、音韻表記から東一、東三同様に円唇化喉音韻尾を持つものと見做して良いことが分かる<sup>1)</sup>。この他、遇撰の模 *o*、虞 *yuō*、魚 *io* も開合の対立が無いと判断する。魚韻は中古音では *ə* であるが、『韻鏡』成書時には既に円唇母音となっていたらうから、模、虞韻と同様に扱って良からう。遇撰を合口とする見方もあるが、この三韻の反切用字の振舞を見ると、開合の対立が無いと考えた方が良いでしょう。本稿では開合対立の欠如の理由をこの主母音の円唇性、韻尾の円唇性の二点を併用して解釈する。通撰の冬 *oŋ/aŋ<sup>w</sup>/*、鍾韻 *ioŋ/iŋ<sup>w</sup>/* などは具体的音声を重視した推定音価に基づき、円唇性主母音ということで説明することも可能である。逆に東三 *iōŋ<sup>w</sup>/iŋ<sup>w</sup>/* は具体的音声を重視した推定音価に基づくなら、一見説明不能のようであるが、『韻鏡』成書時の主母音は円唇化喉音韻尾による同化を生じて、実際には唇の丸めを帯びて実現されていたとして解釈できる。結局のところ通撰に属する韻の全てが開合の対立を欠く。江撰についても、*aŋ<sup>w</sup>/aŋ<sup>w</sup>/* の主母音が同様の同化作用により具体的には円唇母音の *oŋ* となっていたためとも解釈できる。但し『韻鏡』成書時の音韻体系を提示することなく、この手のその場しのぎの中古音の手直しで説明することは最小限に止めるべきである。本稿においては中古音に関し、平山久雄 1967 に修正の手を加えることはしない。

序ながら開合の対立のある韻母においても、唇音が声母の場合にはやはり対立が無い。このことも各転図の開合判定に関係してくるので、適宜議論を加える。

### 1. 現行『韻鏡』の開合

現存する『韻鏡』諸テキストの転図に示される「開」、「合」にはこのような理解に合致しないところがあり、中には「開合」と記されている場合がある。本稿は従来様々な議論があるこの問題について筆者なりの解釈を試みるものだが、論理的整合性が認められても、書誌学的に実証できないところが多く、説得力が十分ではないことを認めざるを得ない。「臆解」と称する所以である。

『韻鏡』では「開」、「合」以外に「開合」と表記される転図は次の通り。第2転の通撰（冬、鍾）、第3転の江撰（江韻）、第4転の止撰（支韻開口相当）、第12転の遇撰（模、虞）である。今、全43枚の転図の撰、所属韻、開合を示すと、以下のようになる。開合で>の右にあるのは、参考までに附した陳廣忠 2003の改訂である。その判断は開合の一般通念に合致したものと言える。序に唇音字が開合で分韻される韻のいずれに配されるかも記しておいた。転図の開合の決定に関係してくるところがあるからである。下線のある方に配される。\_\_\_とあるのは重唇音、軽唇音は網掛けで示す。『韻鏡』成書時には軽唇音化は既に起きていたとの前提で論を進める。右肩に\*を附したものが開合対立の無い撰。従ってこれらには唇音帰属の表示は付いていない（後に論ずる）。

轉撰	I	II	III	IV	入声欄	
01. 通*	( 東一		東三	)	開>合	
02. 通*	( 冬		鍾	)	開合>合	
03. 江*	( 江			)	開合>開	
04. 止	(		<u>支</u> B	<u>支</u> A)	開合>開	
05. 止	(		支 B	支 A)	合	
06. 止	(		<u>脂</u> B	<u>脂</u> A)	開	
07. 止	(		脂 B	脂 A)	合	
08. 止*	(		之	)	開	
09. 止	(		微	廢 )	開	入声欄の廢は蟹撰
10. 止	(		<u>微</u>	<u>廢</u> )	合	入声欄の廢は蟹撰
11. 遇*	(		魚	)	開	
12. 遇*	( 模		虞	)	開合	
13. 蟹	( 哈	皆	祭 B	齊 夬 )	開	皆去のみ合口
14. 蟹	( 灰	皆	祭 B	齊 夬 )	合	
15. 蟹	( 泰	佳		<u>祭</u> A )	開	佳去のみ合口
16. 蟹	( 泰	佳		祭 A )	合	
17. 臻	( 痕		臻/ <u>真</u> B	<u>真</u> A)	開	
18. 臻	( <u>魂</u>		諄	)	合	
19. 臻	(		欣	)	開	
20. 臻	(		<u>文</u>	)	合	
21. 山	(	<u>山</u>	元	<u>仙</u> A)	開	
22. 山	(	山	<u>元</u>	仙 A)	合	
23. 山	( 寒	刪	<u>仙</u> B	<u>先</u> )	開	
24. 山	( <u>桓</u>	<u>刪</u>	仙 B	先 )	合	
25. 效*	( 豪	肴	宵 B	<u>蕭</u> )	開	
26. 效*	(		宵 A)		合>開	

27. 果	( 歌			)	合>開	
28. 果	( <u>戈一</u>	戈三		)	合	
29. 假	( <u>麻二</u>	麻三		)	開	
30. 假	( 麻二			)	合	
31. 宕	( <u>唐</u>	<u>陽</u>		)	開	
32. 宕	( 唐	陽		)	合	
33. 梗	( <u>庚二</u>	<u>庚三</u>	<u>清 A</u>	)	開	
34. 梗	( 庚二	庚三	清 A	)	合	
35. 梗	( <u>耕</u>	清	<u>青</u>	)	開	
36. 梗	( 耕		青	)	合	
37. 流*	( 侯	尤	幽	)	開	
38. 深*	(	侵 B	侵 A	)	合>開	
39. 咸*	( 覃	咸	鹽 B	添	)	開
40. 咸*	( 談	銜	嚴	鹽 A	)	合>開
41. 咸*	(	凡		)	合	
42. 曾	( <u>登</u>	<u>蒸</u>		)	開	
43. 曾	( 登	蒸		)	合	

## 2. 推定その1

開合の対立が無い韻を収めた転図はそもそも「開合」と表記されていたのではないか？もしそうであれば上の 43 枚の転図の開合は本来、以下のようなべきだということになる。

### α. 本来あるべき姿

轉攝	I	II	III	IV	入声欄		
01. 通*	( 東一		東三		)	開合	
02. 通*	( 冬		鍾		)	開合	
03. 江*	(	江			)	開合	
04. 止	(		<u>支 B</u>	<u>支 A</u>	)	開	
05. 止	(		支 B	支 A	)	合	
06. 止	(		<u>脂 B</u>	<u>脂 A</u>	)	開	
07. 止	(		脂 B	脂 A	)	合	
08. 止*	(		之		)	開合	
09. 止	(		微		廢 )	開	入声欄の廢は蟹摂
10. 止	(		<u>微</u>		廢 )	合	入声欄の廢は蟹摂
11. 遇*	(		魚		)	開合	
12. 遇*	( 模		虞		)	開合	
13. 蟹	( 哈	<u>皆</u>	<u>祭 B</u>	<u>齊</u>	夬 )	開	皆去のみ合口
14. 蟹	( <u>灰</u>	皆	祭 B	齊	夬 )	合	
15. 蟹	( <u>泰</u>	<u>佳</u>		<u>祭 A</u>	)	開	佳去のみ合口
16. 蟹	( 泰	佳		祭 A	)	合	
17. 臻	( 痕		臻/ <u>真 B</u>	<u>真 A</u>	)	開	
18. 臻	( <u>魂</u>		諄		)	合	

19. 臻	(		欣	)	開
20. 臻	(		<u>文</u>	)	合
21. 山	(	<u>山</u>	元	<u>仙 A</u> )	開
22. 山	(	山	<u>元</u>	仙 A)	合
23. 山	(	寒	<u>刪</u>	<u>仙 B</u> <u>先</u> )	開
24. 山	(	<u>桓</u>	<u>刪</u>	仙 B <u>先</u> )	合
25. 效*	(	豪	肴	宵 B <u>蕭</u> )	開合
26. 效*	(			宵 A)	開合
27. 果	(	歌		)	開!
28. 果	(	<u>戈一</u>	戈三	)	合
29. 假	(	<u>麻二</u>	麻三	)	開
30. 假	(	麻二		)	合
31. 宕	(	<u>唐</u>	<u>陽</u>	)	開
32. 宕	(	唐	陽	)	合
33. 梗	(	<u>庚二</u>	<u>庚三</u>	<u>清 A</u> )	開
34. 梗	(	庚二	庚三	清 A)	合
35. 梗	(	<u>耕</u>	清	<u>青</u> )	開
36. 梗	(	耕		青)	合
37. 流*	(	侯	尤	幽)	開
38. 深*	(		侵 B	侵 A)	開合
39. 咸*	(	覃	咸	鹽 B 添)	開合
40. 咸*	(	談	銜	嚴 鹽 A)	開合
41. 咸*	(		凡	)	開合
42. 曾	(	<u>登</u>	<u>蒸</u>	)	開
43. 曾	(	登	蒸	)	合

### 3. 推定その2

そして開合の対立の無い韻の撰の転図が複数存在した場合、対立の有る韻の転図が「開」、「合」の順に並ぶのに合わせ、「開合」を「開」、「合」、「開」、「合」…とのみ表記するようになったのではないか？一枚しか無い場合は「開」。そう考えると、-u 韻尾韻の 25.效、26.效 が開、合となっているのも理解できる。今、上に挙がる「開合」をこの予想に従い、「開」、「合」のいずれかに振り分けて表示するならば、以下のβのようなになる。このような開、合対立の無い韻の「開」、「合」については、有る韻における「開」、「合」と区別して「(疑似)開」、「(疑似)合」と仮称することにしたい。

#### β. あるべき改訂の姿

轉攝	I	II	III	IV	入声欄
01. 通*	(	東一	東三	)	(疑似)開
02. 通*	(	冬	鍾	)	(疑似)合
03. 江*	(	江		)	(疑似)開
04. 止	(		<u>支 B</u>	<u>支 A</u> )	開
05. 止	(		支 B	支 A)	合

06. 止	(		<u>脂 B</u>	<u>脂 A</u>	)	開	
07. 止	(		脂 B	脂 A	)	合	
08. 止*	(		之		)	(疑似)開	
09. 止	(		微		廢 )	開	入声欄の廢は蟹摂
10. 止	(		<u>微</u>		<u>廢</u> )	合	入声欄の廢は蟹摂
11. 遇*	(		魚		)	(疑似)開	
12. 遇*	( 模		虞		)	(疑似)合	
13. 蟹	( 哈	皆	<u>祭 B</u>	<u>齊</u>	夬 )	開	皆去のみ合口
14. 蟹	( 灰	皆	祭 B	齊	<u>夬</u> )	合	
15. 蟹	( 泰	<u>佳</u>		<u>祭 A</u>	)	開	佳去のみ合口
16. 蟹	( 泰	佳		祭 A	)	合	
17. 臻	( 痕	臻/ <u>真 B</u>	<u>真 A</u>		)	開	
18. 臻	( <u>魂</u>	諄			)	合	
19. 臻	(	欣			)	開	
20. 臻	(	<u>文</u>			)	合	
21. 山	(	<u>山</u>	元	<u>仙 A</u>	)	開	
22. 山	(	山	<u>元</u>	仙 A	)	合	
23. 山	( 寒	刪	<u>仙 B</u>	<u>先</u>	)	開	
24. 山	( <u>桓</u>	<u>刪</u>	仙 B	先	)	合	
25. 效*	( 豪	肴	宵 B	<u>蕭</u>	)	(疑似)開	
26. 效*	(			宵 A	)	(疑似)合	
27. 果	( 歌				)	開!	
28. 果	( <u>戈一</u>	戈三			)	合	
29. 假	(	<u>麻二</u>	麻三		)	開	
30. 假	(	麻二			)	合	
31. 宕	( <u>唐</u>		<u>陽</u>		)	開	
32. 宕	( 唐		陽		)	合	
33. 梗	(	<u>庚二</u>	<u>庚三</u>	<u>清 A</u>	)	開	
34. 梗	(	庚二	庚三	清 A	)	合	
35. 梗	(	<u>耕</u>	清	<u>青</u>	)	開	
36. 梗	(	耕		青	)	合	
37. 流*	( 侯		尤	幽	)	(疑似)開	
38. 深*	(		侵 B	侵 A	)	(疑似)開	
39. 咸*	( 覃	咸	鹽 B	添	)	(疑似)開	
40. 咸*	( 談	銜	嚴	鹽 A	)	(疑似)合	
41. 咸*	(		凡		)	(疑似)合	
42. 曾	( <u>登</u>		<u>蒸</u>		)	開	
43. 曾	( 登		蒸		)	合	

#### 4. 推定 $\alpha$ 、 $\beta$ と現状との齟齬

現行の『韻鏡』に見える開合表示は  $\alpha$  から  $\beta$  への改訂が不徹底かつ杜撰に終わった結果と考えると納得が行く。現行テキストで 01.通、02.通 及び 11.遇、12.遇 が「開」、  
「開合」となっているのは、「(疑似)開」、「(疑似)合」と改めるべきであった。39.

咸、40.咸、41.咸 が「開」、「合」、「合」となっているのも同様に解釈できよう。三枚目の 41.咸 が「開」ではなく、「合」となっているのは、韻目が軽唇音声母のものであること（凡、范、梵、乏と四声に亘り総て軽唇音）、そしてこの転図に現れる唇音が軽唇音のみであることが関係していると思われる。次節の説明にある通り、軽唇音は概して合口の転図に配されるものだからである。

### 5. 転図上の唇音配置の再検討

太田斎 2011 で指摘したことだが、唇音の配置は三等韻では重唇音は開口、軽唇音は合口（陽韻が唯一の例外）、四等韻では一律開口に配される。一等韻、二等韻は概ね前者は合口、後者は開口が多いが、三、四等韻の場合に較べるとこれに合致しない例も少なくない。太田斎 2011, pp.56-57 の § 3. 韻図における唇音字の配置状況の一覧表を参考までに以下に掲げる。

		開口	合口
一等韻	: 蟹掇	哈(?)	灰
		泰	
		臻掇	(痕/)魂
		山掇	(寒/)桓
		果掇	(歌/)戈
二等韻	: 蟹掇	宕掇 唐	
		曾掇 登	
		皆(平上)	皆(去)
		佳(平上)	佳(去)
			夬
	山掇	山	刪
	仮掇 麻		
	梗掇 庚		
三等重紐韻	: 止掇	耕	
		支	
		脂	
		祭	
		臻掇 臻真(/諄)	
	山掇 仙		
	梗掇 庚		
	清		
	曾掇 蒸		
三等 C 類韻	: 止掇		微
		蟹掇	廢
		臻掇	文
		山掇	元
四等韻	: 蟹掇	宕掇 陽	
		齊	

山撰 先  
梗撰 青

ここで改めて各転図に於ける唇音配置について通底する規則性を探ってみると、どうやら開合分韻の場合には韻書で合口韻に配されるのに従い、転図でも合口に配される。もし分韻していない場合には韻書には頼れないので、韻目自体の読音が開、合いずれであるかに拠っていると見えそうである。

例えば分韻していない一等韻の韻目泰、唐、登はそれ自体が開口であるから、唇音は開口に配される。蟹撰の場合、開口の咍韻にも唇音字が現れるが、いずれも切韻系韻書で増加字として現れるものか、『集韻』に基づく増加字ばかりであるから、一先ず咍韻のあるべき姿は唇音皆無として、考慮の対象から外して良い。二等韻は開合で分韻しないものばかりで、韻書に依拠して判断することはできない。韻目は夬を除けば、いずれも開口字である。従ってこの「ルール」に基づけば、夬は「合」、それ以外の韻では「開」に配置ということになる。皆、佳の二韻が去声のみ合口となるのは去声のみの韻（泰、祭、夬のうち特に合口に配される夬韻）との対比が考慮されたからだろう。ただ刪が「合」となるのは例外である。本来なら第 23 転に配すべきだが、ここでは三等仙 B：四等先と拗音韻同士を対比させ、他方、第 24 転で一等桓：二等刪と洪音同士を対比させるという意図が働いたからではないかと考える。

三等韻の場合も同様で、韻書で開合分韻していなければ韻目読音の開合如何で転図の配置が決定される。重紐韻の韻目は総て開口字なので、唇音は開口に配される。臻撰三等の真/諄の分韻は原本『切韻』では行われていなかった。循環論的だが、『韻鏡』で唇音が真/諄の諄韻ではなく、真韻に配されるのは、この「ルール」を敷衍して考えれば、所拠切韻系韻書テキストが開合分韻されていないものだったということになる。但し欄外の韻目には「諄」も現れるから、この「諄」は後の改訂で、分韻されたテキストを参照することで「真」がかく改められたと想定せねばならない。C 類韻でも開合分韻していなければ、韻目自体の読音で決定するというのは一貫するが、韻目に開合判定不能の唇音声母字が現れる。これについては唯一分韻している、欣/文について韻書では合口の文韻（この韻目も唇音字）に所属させていることに倣い、合口と判断されたものであろう。かくして三等重紐韻は韻目が総て開口字なので、唇音は「開」に、C 類韻においては合口字の元韻においては「合」に、微、廢は開合分韻の文の例に倣い、やはり「合」、そして陽は開口字なので「開」となる。C 類韻の中で、陽韻の軽唇音のみ開口に配されるというのはこのようにして説明できる。

四等韻は当然のことながら外転しか無く、韻目は二等韻に似て開口の読音のものばかりである。よって「ルール」の通り、唇音（重唇音のみ）は開口に配置される。

## 6. 宕撰の唇音配置再論：自説の訂正

『韻鏡』第 31,32 転宕撰の扱いは異例に見える。一等の唇音は「合」に、三等の軽唇音も「合」に配置されることが予想されるが、実際には共に「開」の転図にある。

31. 宕（唐 陽 ） 開  
32. 宕（唐 陽 ） 合

これについて太田齋 2023 はこの二枚の転図が、推定される主母音からすれば、外転と

あるべきと思われるのに、共に外転ではなく、内転と表示されていることと関係があるのではないかと推測し<sup>2)</sup>、韻尾の変化(-ŋ/-k > -ŋ<sup>w</sup>/-k<sup>w</sup>)を想定した。以下に修正案を提示するが、その前に先ず修正前の解釈を紹介する。

宕摂の唐、陽は唇音化喉音韻尾を持たないが、以下の推定音価一覧で見ると通り、-ŋ/-k 韻尾諸韻の中で唯一、主母音が奥寄り広母音である。

-ŋ/-k 韻尾	-ŋ <sup>w</sup> /-k <sup>w</sup> 韻尾
宕摂 唐 aŋ;ak, uaŋ;uak	通摂 冬 oŋ;ok (/aŋ <sup>w</sup> ;ak <sup>w</sup> /)
陽 iaŋ;iak, yaŋ;yak	鍾 ioŋ;iok (/iaŋ <sup>w</sup> ;iak <sup>w</sup> /)
梗摂 庚二 aŋ;ak, uaŋ;uak	江摂 江 aŋ <sup>w</sup> /ak <sup>w</sup>
庚三 iaŋ/iak, yaŋ/yak	
耕 eŋ/ek, ueŋ/uek、	
清 ieŋ/iek, yeŋ/yek、	
青 eŋ/ek, ueŋ/uek	
曾摂 登 əŋ/ək, uəŋ/uək	通摂 東一 ǒŋ <sup>w</sup> /ǒk <sup>w</sup>
蒸 iǎŋ/-, iǎŋ/yǎk	東三 iǎŋ <sup>w</sup> /iǎk <sup>w</sup>

この a は中古音にあつては -ŋ<sup>w</sup>/-k<sup>w</sup> 韻尾と結合しない。つまり -ŋ/-k 韻尾が -ŋ<sup>w</sup>/-k<sup>w</sup> 韻尾となっても音韻対立に影響を及ぼすには至らない。体系的な空き間があることもあつて、円唇性を伴う a に後続する喉音韻尾は同化作用による円唇音化が阻まれることがなく、音声的に -ŋ<sup>w</sup>/-k<sup>w</sup> 韻尾になる傾向を持っていた。『韻鏡』成書時には江韻 aŋ<sup>w</sup>/ak<sup>w</sup> : 唐韻 aŋ<sup>w</sup>/ak<sup>w</sup> のような対立状況を呈していた。『七音略』で宕摂（開口）入声字が（開合の対立の無い）-u 韻尾諸韻を収める第 25 転効摂の入声の欄に重出するのはその証左と考えられる。そして唇音化喉音韻尾を持つに至って、江摂同様に開合対立が無いものと認識され、本来真正開合対立であったものが「（疑似）開合」の扱いを受けるようになった。しかも一等韻と三等韻しかないため、内転系のように扱われた。その結果、宕摂の唇音は通摂同様に内転「開」として処理され、一等韻の重唇音と三等韻の軽唇音が共に開口の転図に現れることになった。しかしこの解釈では方言音を以てしても陽韻唇音次濁が脱軽唇音化を生じない点の説明がつかなかった。（紹介終わり）

本稿では陽韻唇音次濁が軽唇音化した後に -ŋ/-k > -ŋ<sup>w</sup>/-k<sup>w</sup> の変化が起こったと改めたい。『七音略』第 25 転効摂の入声の欄に配される三等唇音次濁の窠に何らかの字が存在していれば、その読音から軽唇音化と -ŋ/-k > -ŋ<sup>w</sup>/-k<sup>w</sup> の先後関係を検証する手掛りが得られるが、そもそも『切韻』系韻書の藥韻には唇音次濁字は存在しない。当然、『七音略』でも空欄である。舒声字がいずれも軽唇音化を生じていることに基づき、軽唇音化が先に生じたと思ふ方が論理的に破綻が無かろう。原本『玉篇』（河野六郎 1937）や『經典釈文』（邵榮芬 1995）には軽唇音化の萌芽が見られるという指摘もあるから、軽唇音化を中古音からそう離れていない早い時期に想定することに無理は無い。本稿で新たに提示した説では、一等韻目の「唐」、三等韻目の「陽」がいずれも開口字であるから、唇音字は開口に置かれるということになる。このように考えると、陽韻の唇音次濁が軽唇音化しないことは問題とならない。

## 7. 例外の解釈

現行『韻鏡』第 4 転支の「開合」は不可解である。支韻には開合の対立があり、第 5 転



が「合」となっているからには、第 4 転を「開」と改めることに問題は無い。希少ではあるものの現実に「開」とするテキストも存在する（例えば宝生寺蔵福德二年本）。試みにここで開合対立の見られない、一枚のみの第 8 転之韻の転図にあるべき「開合」が何らかの理由で誤って第 4 転に記されたものという仮説を提示したい。ただ第 8 転を「開合」とするテキストは実在しないようである。第 8 転之韻  $i\ddot{a}/i\Lambda u/$  はあたかも合口韻が欠けているかのように見え、しかも唇音字が皆無である。この転図を見ると唇音韻尾を持つ韻同様の分布状況を示していることが分かる。奥舌高母音の韻尾  $-i /-u/$  が（ $-u$  韻尾同様）合口介音との共起を許さないということなのかとも思われるが、同じ韻尾を持つ外転系の佳  $ai/au/$  には開合の別がある。或いは  $-u$  韻尾に比して韻尾  $-i /-u/$  の合口忌避作用は外転系には及ばないような弱いものということであろうか。今のところ説得力のある音声上の理由は不明である<sup>3)</sup>。この止摂「開合」の解釈については総て推測の域を出ない。

残るもう一つの問題は第 27 転果撰歌韻が「合」とされることである<sup>4)</sup>。これについては既に三根谷徹 1953 が中古音と韻図作成時の音韻体系との間のズレ ( $a > \ddot{a}$ ) から説明している。中古音の推定音価に照らせば、当然第 27 転果撰歌韻「開」、第 28 転果撰戈韻「合」とあるべきことは言を俟たないが、現代音（普通話）では前者に属しながら合口、後者に属しながら開口相当という例が見られる。例えば、今この二枚の転図から該当するものを拾うならば、第 27 転「多  $du\ddot{o}$ 」、「我  $w\ddot{o}$ 」、「羅  $lu\ddot{o}$ 」；第 28 転「戈  $g\ddot{e}$ 」、「科  $k\ddot{e}$ 」、「課  $k\ddot{e}$ 」など。果撰は原本『切韻』では開合の分韻は為されていなかったとされ、三根谷徹 1953 は切韻系韻書諸テキスト間に見られる反切用字上の歌/戈の混用を指摘している。してみると『広韻』の開合帰属の判断を疑ってみる必要があるのかも知れない。しかしもう一つの可能性として  $a, ua > \ddot{a}, u\ddot{a}$  となることで開合の別が曖昧になり、現代音に見られるズレを引き起こしたとも考え得る。また内外転は本稿の直接の議論対象ではないが、附言すると、主母音が内転的になり、転図上の分布も一等と三等のみであるから、内転系転図の分布状況と同じである。原本切韻では三等字は平声合口の一例のみだが、『韻鏡』諸テキストでは所拠切韻系韻書テキストの増加小韻を反映し、三等の窠字は増えていて、より一、三等の分布状況は明瞭になっている。この状況は原『韻鏡』でも同様だったと推測される。このようなことから内転と表示されることになったのであろう。いずれにせよ三根谷徹 1953 の、第 27 転果撰歌韻も主母音が円唇性を帯びることで開合の対立が失われたとする説は、同時に第 27、28 転が内転と表示されることも説明ができ、関連先行研究で提示された見解の中で最も説得力があると言えよう。

以上のように考えることにより、裏付けとなる書誌的データが見出せないにせよ、『韻鏡』の開合表示は統一的に解釈できる。

注：

- 1) 三根谷徹 1956 の提示する推定音価は一種類で、唇音化喉音韻尾韻に関しては平山久雄 1967 の後者と一致している。つまり、東一  $\Lambda u\eta (= \Lambda \eta^w)$ 、東三  $i\Lambda u\eta (= i\Lambda \eta^w)$ 、冬  $au\eta (= a\eta^w)$ 、鍾  $ia\eta (= ia\eta^w)$ 、江韻  $au\eta (= a\eta^w)$ 。三根谷徹 1956 においても唇音化喉音韻尾韻は  $-u\eta$  と表記されている。（）内はそれを本稿採用の表記に置き換えたもの。
- 2) 本来ならば内外とは何かという点について予め定義を提示すべきであるが、遺憾ながら定見を持たない。とりあえず外転は主母音が前寄り、内転は中央（現代音だと a 系：非 a 系若しくは  $\ddot{a}$  系とも）という主母音二大別とする考えと韻図上の分布状況の違いとする考えの両者を併せ用いる。この二説がどのように総合されるべきなの

か、議論が必要である。

- 3) 三根谷徹 1956 の推定音価は之 *iei* (=脂)、佳 *v, ue*。母音韻尾 *-i /-u/* を認めない。三根谷徹 1956 に依拠するならば、之韻に開合対立が無いことの理由は他に求めなければならない。
- 4) 果摂に第 27 転「(疑似) 開」、第 28 転「(疑似) 合」というような処理を窺わせるところは見られないが、遇摂の扱いと対比してみても良いのではないか。永禄本(国会図書館蔵本)では遇摂第 11 転「合」、第 12 転「合」となっている(天文十年本では、「合」と「開合」)。ほとんどのテキストで第 11 転「開」、第 12 転「開合」となっているので、可能性は低いと言わざるを得ないが、永禄本に基づけば、第 27 転「(疑似) 合」、第 28 転「(疑似) 合」が遇摂第 11 転「(疑似) 合」、第 12 転「(疑似) 合」に平仄を合わせたと想定する余地もある。但しこの永禄本の姿は 4. 推定  $\alpha$ 、 $\beta$  と現状との齟齬で提示した可能性とは一致しない。

## 参考文献

### 日本語

- 太田斎 2011 韻図における唇音字の開合配置, 『開篇』 Vol.30, pp.54-88  
太田斎 2012 于母重紐問題と助紐字を巡る臆説, 『開篇』 Vol.31, pp.226-250  
河野六郎 1937 玉篇に現れたる反切の音韻的研究, 東京大学卒業論文, 『河野六郎著作集 2』, 平凡社, 1979, pp.3-154 に収録。同 2 別冊「資料音韻表」 pp.1-78  
平山久雄 1967 中古漢語の音韻, 牛島徳次等編『中国文化叢書 1 言語』, 大修館書店, pp.112-166 (音韻論第 3 章)  
三根谷徹 1953 韻鏡における歌(戈)韻の位置, 『東洋學報』 35-3・4, pp.81-100  
三根谷徹 1956 中古漢語の韻母の体系一切韻の性格一, 『言語研究』 31, pp.8-21

### 中国語

- 陳廣忠 2003 《韻鏡通釋》, 上海辭書出版社, 477 頁  
邵榮芬 1985 《經典釋文音系》, 學海出版社, 臺北, 541 頁  
太田齋 2023 東三、尤韻明母讀音之我見, 《神戸外大論叢》, 第 76 卷, 107-135 頁

### 2024.3.6 ニヶ所訂正

『七音略』の「重中重」、「軽中軽」などの表記に見られる、一字目の「重」、「軽」についても「重」=開及び(疑似)開、「軽」=合及び(疑似)合として解釈できる。第 26 効、第 32 咸の二枚が「軽」とあるべきところ、「重」となっていて一致しないが、いずれも『韻鏡』(疑似)合相当の転図であり、『韻鏡』に即して言えば、「開合」を(疑似)開=(疑似)重、(疑似)合=(疑似)軽に振り分けるに当たって誤ったということだろう。遺憾ながら、「中」の後の三字目の「重」、「軽」が何を意味するのかはなお不明である。(訂正に際し記す)